

## 遺跡分布調査における地理学の役割

辰 己 勝\*

### I. はじめに

考古学的遺跡の分布調査は、全国各地で実施され、その成果は「遺跡地図」・「遺跡目録」という形で公表されている。その調査方法は、従来、調査員等が現地を歩いて遺物の表面採集を行う表採法が主体であった。そのため、地域によってかなりの精粗があり、また内容も不統一であった。さらに、遺跡のなかには、現在の地表面での表面採集では発見できないような深いところに埋もれている例や、既に集落等の立地により、発掘が困難になっている場合も多い。とりわけ、沖積平野における埋没遺跡の分布を調べる場合には、現在の地表面下の堆積物の状況等について詳細な情報を得る必要がある。そこで、新しい形の分布調査の方法として、地理学的手法を用いて沖積平野での分布調査を行ってきたので、それについて紹介をしたい。

なお、筆者は滋賀県の野洲川下流の平野に重点をおいて調査を進め、その中の中主町域<sup>ちゅうしょく</sup>の詳細遺跡分布調査にたずさわってきた。その成果の一部は、筆者をはじめ4名の調査員によってこれまで4冊の概要報告書<sup>1)</sup>にまとめており、口頭での発表も行った<sup>2)</sup>。さらに、本報告書も作成中であり、詳しい内容と各調査員の研究成果についてはそれらを参照して

いただきたい。

### II. 平野地形研究と遺跡の発掘

遺跡の発掘現場は、平野の地形研究にとって絶好の調査・観察地点となり、そこでのデータをもとに多くの研究成果がある。1980年代前半までに先史・古代の環境復原に利用されてきた例としては、日下(1980)<sup>3)</sup>、安田(1980)<sup>4)</sup>、井関(1983)<sup>5)</sup>、高木(1985)<sup>6)</sup>などの著書がある。そして、遺跡の発掘調査報告書にも、形式的な「地理的位置」の記載のみでなく、「遺跡付近の地形環境の復原」として地形研究者によって記されたものが多くなってきた。その際に用いられた一般的な手法としては、現地調査と空中写真から地形分類図の作成、大縮尺地形図から等高線図(1m間隔)の作成、および既存のボーリング資料と現地での検土杖による調査から地下構造の推定を行なうことであった。一部では堆積物の花粉分析も行なわれた。これらを通じて問題となった点を整理すると次のようである。

1) 地形分類図や等高線図は、現在の平野の微地形(自然堤防の微高地や旧河道の凹地)の差異が表現されているにすぎない。しかしながら、遺跡の分布図をこれらの図の上に重ね合わせて、それぞれの立地環境を推定して

\* 大阪市立中央高等学校(立命館大学非常勤講師)

いた。その結果、たまたま過去の集落跡と現在の微高地が一致していると、すべての微高地が古くからの集落に利用されていたような錯覚に陥りやすかった。

2) また、旧河道が実際の河道として機能していた時期やその存続期間の特定がなされておらず、多くの旧河道が長期にわたって河道であったと判断されがちであった。

3) 遺跡周辺の地形については、現在の地形から判断することが多く、遺跡が営まれた当時の状態の検証がなされていなかった。

4) 既存のボーリング資料は沖積層の大まかな層序の把握にとどまることが多く、地質断面の模式図として提示できるにすぎない。これらとトレンチでの地層断面をつなげるのは困難であった。

5) 花粉分析が行なわれた遺跡については、それをもとに景観復原図も作られたが、平野内の限られた場所のみでの結果から、平野全体の古環境の復原には限界があった。

6) 一方、発掘現場の担当者は、トレンチの断面を細かく区分し、各時代面についての地形や土地利用を再現しようとしている。この場合、 $10^2$  年オーダーでの地形発達史を編むことを要求されているが、上記の地形分類図の段階ではとてもその要求を満たすことはできなかった。

このように、1980年代前半頃までは、地形研究者の提示する資料と発掘現場担当者の要求とが不一致の感があり、お互いに一方通行的な情報交換に終わっていたようである。

その後、平野の地形研究の視点も変化して、より微細なスケールで地形を分類するとともに、各遺跡のグリッドやトレンチから、埋没している微高地や旧河道の存在を明らかにし

ようとした。そして、氾濫ごとの地形変化をも推定している<sup>7)</sup>。

また、近年では発掘現場から得られた資料をもとに、<sup>14</sup>C や年輪からの年代測定、花粉およびプラント・オパール分析、広域火山灰の検出、古地震研究などの幅広い分野で研究が進み、考古学や歴史学の分野に自然科学的調査が加わり、新しい体系での研究も盛んになってきた。その例として1987年の日本第四紀学会でのシンポジウム——「陸の古環境復元」<sup>8)</sup> や、1989年の第3回「大学と科学」公開シンポジウム——新しい研究法は考古学になにをもたらしたか<sup>9)</sup> ——などがあげられる。

このような時期に、地形研究者の遺跡に関する注目はさらに深まり、発掘現場には必ず出向き、露頭の観察、分析資料の採取を積極的に行い、古環境の復原はもとより、微地形の解析、水田構造の検出などに大きな役割を果たしつつある。そして、発掘調査報告書には、「…遺跡が営まれた時期における地形環境」あるいは、「…遺跡とその周辺の古地理の復原」などのタイトルで章立てが行なわれ、発掘現場担当者と十分な討議を経て記載されている場合も多くなった。これは従来から行なわれていた現在の地表面における地形分類図や土地条件図からの地形環境の推定ではなくて、実際に遺跡の営まれた時代についての地形や植生・土地利用の復原を念頭において調査を進めているためである。したがってその報告はかなりの説得力がある。さらに前記の自然科学的調査も加わった遺跡については、各時代ごとの詳細な検証の結果、古環境はもとより先史・古代の人々の生活様式全般の復原が可能となり、より身近に過去を再現してくれている。

### III. 遺跡の分布調査の必要性

中主町を例にとると町内の遺跡の数は1964年にはわずか7遺跡が点で示されたのみであったが、1980年には28遺跡になり各遺跡の範囲が枠で図示されるようになった。さらに1993年には47遺跡を数え、町域の64%が遺跡の範囲にふくまれるという状態である。このように急速に遺跡の数が増加した背景には、一つは町による区画整備事業や民間の宅地開発の進展があげられる。二つ目には、遺跡についての認識が時代とともに変化し、初期の段階では、明瞭な構築物の存在が確認されているものだけであったが、やがて、埋没している遺構や遺物の散布地まで含めるようになってきたためである。

そこで中主町教育委員会では1982年度より、表採法によって、町内を5地区に分け、調査員等が現地を歩いて遺物の表面採集を行ない遺跡の発見に努めた。しかし、町内全域が沖積地（野洲川、日野川の最下流部）に位置する同町では、必ずしも遺物の分布する所が遺跡で、その逆が遺跡でないとは言いきれず、表面に全く遺物のみられない低湿な水田でも、その下層より大遺跡が発見される例（西河原森ノ内遺跡、光相寺遺跡等）も多くなってきた。さらに各遺跡は、遺構面（旧生活面）が複数みられ、各遺構面の深さ・遺構密度・年代幅・性格を特定するのが困難であった。一方、分布範囲そのものについても、集落跡や寺院跡等の狭義の遺跡なのか、散布地のような広義のものであるかの判断も容易ではなかった。

このように表採法では、沖積平野に埋没する遺跡を発見し、その内容を理解するには不

十分であるため、早急な遺跡の把握と周知化を目的として、先の5カ年計画（分布調査（I）と呼称）に新たに1987年度からの5カ年計画（分布調査（II）と呼称）を設定して、国庫および県費補助金により、考古学と地理学および関連する自然科学的分析をえた共同研究による詳細な分布調査を行なうことになった。

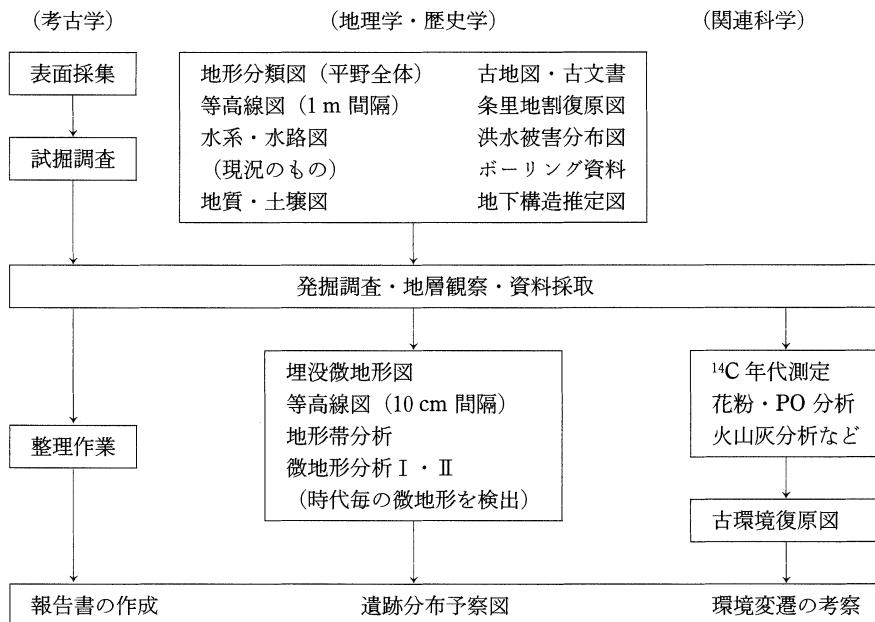
なお、中主町内のみでも、近年では毎年50件前後の発掘調査が行なわれており、そこでも数多くのトレンチでの観察や資料採取が行なうことができ、分布調査の試掘結果とあわせると、かなりの情報を得ることができる。ただし、発掘調査地点は、その大半が、町の中心部に集中しているため、湖岸部や河川沿いは後述するように、分布調査の試掘に頼らざるを得なかった。

### IV. 分布調査の方法

これまでの町内および周辺地域での既発掘のデータの収集・整理や、古地図・小字図の収集、洪水データの収集・分析等を行いながら、以下のような調査を行なった（第1図、第1表参照）。

1) 小地域毎の表採法に加えて、考古学的な試掘調査を行った。町内の47遺跡中、19遺跡で実施し、37トレンチを設けた。試掘地点は、町内各所に散らばるように配慮し異なった地形面での資料が得られることを念頭においた。

2) 古地形・古環境の復原等の地理学的調査を行なった。これには、琵琶湖の湖岸に展開する平野の地形を各河川下流域毎に特徴を整理したのち、湖南平野全体の地形分類図、



第1図 遺跡分布調査と地形環境調査

等高線図（1 m 間隔）を作成した。

一方、町内全域については、大縮尺の空中写真（5千分の1）の判読から埋没微地形復原図を作成した。

さらに、500分の1実測図から標高点の数値を読み取り、それをもとに 10 cm 間隔の等高線図を町内全域にわたって作成している。これには、膨大な時間と労力が必要であり、かつ精緻な作業を伴っている。

3) 花粉分析やプラント・オパール分析によって、植生・気候の復原や、農耕の諸問題、土地の利用状況等を検討した。各遺跡・試掘地点で資料を採取し 7箇所で分析が完了している。

4) ボーリング資料、<sup>14</sup>C 年代測定、火山灰の分析等による地層の層序学的研究をおこなった。ボーリング柱状図は町内のみでも 250余本を収集し、<sup>14</sup>C 年代測定は 12 地点で

19試料の結果が得られた。

## V. 主な成果

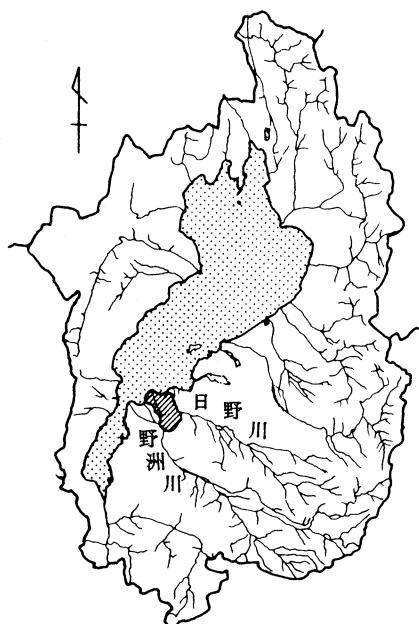
昭和62年度から単年度ごとに 4 冊の「中主町内遺跡分布調査（Ⅱ）概要報告書」刊行し、4 名の調査員が各分野での調査の成果を公表してきた。その主なものをあげると以下のようである。

1) 各時代（7世紀、8世紀、9～10世紀、11～13世紀）の集落跡・寺院跡分布図を作成して集落の変遷を明らかにした（第3図、第4図）。その結果、7世紀までは、わずか 5 遺跡しかなかった集落跡は、8世紀には 8～9 遺跡になった。9～10世紀には一時的に断絶したものが多かったが、11～13世紀には 24 遺跡に増加して、その分布は旧内湖の縁辺や旧湖岸までみられる。その多くは平安時代後

遺跡分布調査における地理学の役割

第1表 町内遺跡分布調査年度別計画表

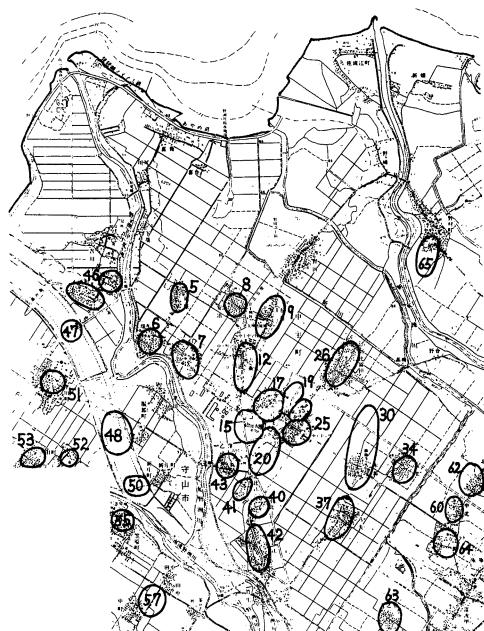
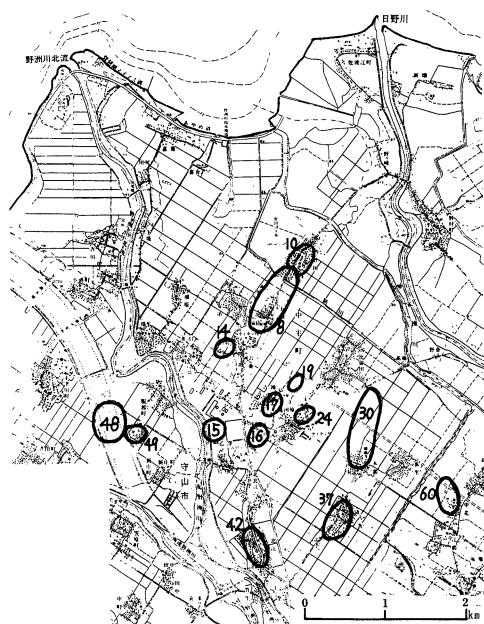
年度	試掘調査及び踏査	空中写真判読による地形分類図作成他	資料収集	成果
62	・試掘地点の選定 ・試掘調査と踏査 断面図 遺構実測図 遺物の整理	・地形分類図の作成 1/10,000 ・等高線図の作成 1 m	・小字図、洪水データの収集 ・古地図の収集 ・既ボーリング資料の収集	・ $10^3$ オーダーの地形発達史 ・調査遺跡の概要
63	同上	・地形分類図の作成 1/2,500 ・等高線図の作成 0.5 m	・既ボーリング資料の収集 ・既発掘データの整理	・ $10^2$ オーダーの地形発達史 ・調査遺跡の概要
H元	同上	・埋没地形図作成 (0.1 m) 第1次予察	・既ボーリング資料の収集 ・既発掘データの整理	・氾濫ごとの地形変化 ・調査遺跡の概要 ・埋没地形と遺跡範囲の予察図
2	同上	・埋没地形図作成 (0.1 m) 第2次予察		・調査遺跡の概要 ・埋没地形と遺跡の確認
3	同上 ・遺物整理と年代確認	・埋没地形図		・ $10^2$ オーダーの微地形発達史 ・景観変遷史 ・遺跡範囲予察図 以上の本報告書の刊行



第2図 中主町位置図

期以降のもので、新田開発に伴う集落とみなされている。また、各時代を通じて継続しているものは五条、木部、八夫の3遺跡のみで、これらはいずれも北北東方向に伸びる形成の古い自然堤防上に立地しており、洪水の被害を受けにくい場所を利用していたことも判明した。一方、光相寺遺跡のように自然堤防の縁辺部の洪水被害を受けやすい場所に立地し、断絶しながらも中世の集落の元を築いていった例もあり、その複雑な立地環境の復原は興味深い課題である。

2) 野洲川下流平野全体の地形分類と地形帶の区分からこの平野の形成過程が明らかになった(第6図、第7図参照)。そして、中主町を含む旧北流の右岸側では野洲川の大規模な流路変遷に伴う扇状地や自然堤防の形成

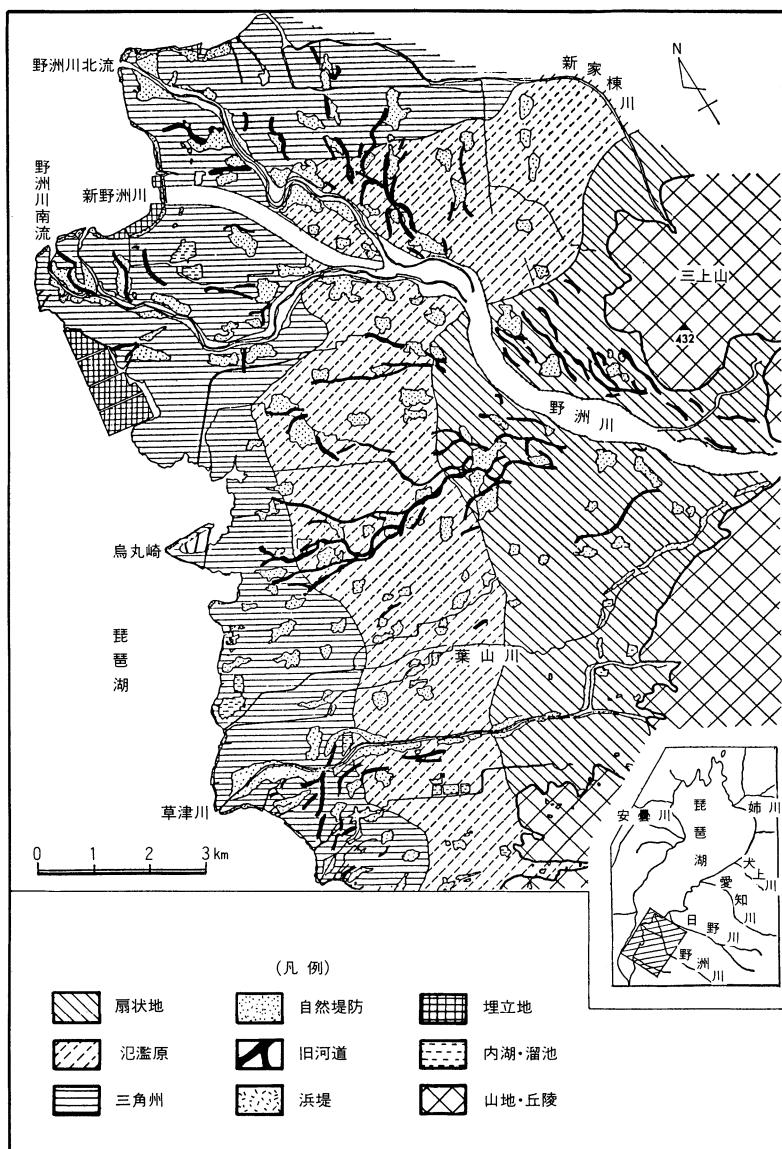


第3図 8世紀の集落跡・寺院跡分布図  
(辻 広志 1989)

1 野田沼遺跡	35 虫生館遺跡
2 安治口戸遺跡	36 野畠遺跡
3 野田遺跡	37 八夫遺跡
4 彼岸地遺跡	38 八夫西ノ後遺跡
5 須原遺跡	39 八夫流遺跡
6 堤遺跡	40 小比江遺跡
7 井口遺跡	41 堂ノ後遺跡
8 安治放光寺遺跡	42 比江遺跡
9 五条遺跡	43 乙窪遺跡
10 五条今屋遺跡	44 鷹部屋敷遺跡
11 御明田古墳群	45 吉川遺跡
12 六条遺跡	46 吉川東出遺跡
13 六条政所遺跡	47 吉川南遺跡
14 六条薬師堂遺跡	48 服部遺跡
15 吉地薬師堂遺跡	49 服部廃寺
16 光相寺遺跡	50 新庄遺跡
17 吉地大寺遺跡	51 幸津川遺跡
18 西河原蒲窪遺跡	52 立花遺跡
19 西河原森ノ内遺跡	53 戸田遺跡
20 光明寺遺跡	54 笠原南遺跡
21 大田遺跡	55 笠原遺跡
22 湯の部遺跡	56 川田遺跡
23 西河原宮ノ内遺跡	57 中北遺跡
24 西河原遺跡	58 長塙遺跡
25 比留田法田遺跡	59 川中遺跡
26 比留田遺跡	60 中北遺跡
27 薮地城跡	61 永原廃寺
28 比留田觀音堂遺跡	62 北北遺跡
29 燐矢遺跡	63 五之里北遺跡
30 木部遺跡	64 江部遺跡
31 木部天神前古墳	江部西遺跡
32 錦織寺遺跡	上町・常念寺遺跡
33 木部川ノ手遺跡	福泉寺遺跡
34 虫生遺跡	65 高提遺跡

(1~47は中主町内の遺跡)

第4図 11~13世紀の集落跡分布図  
(辻 広志 1989)

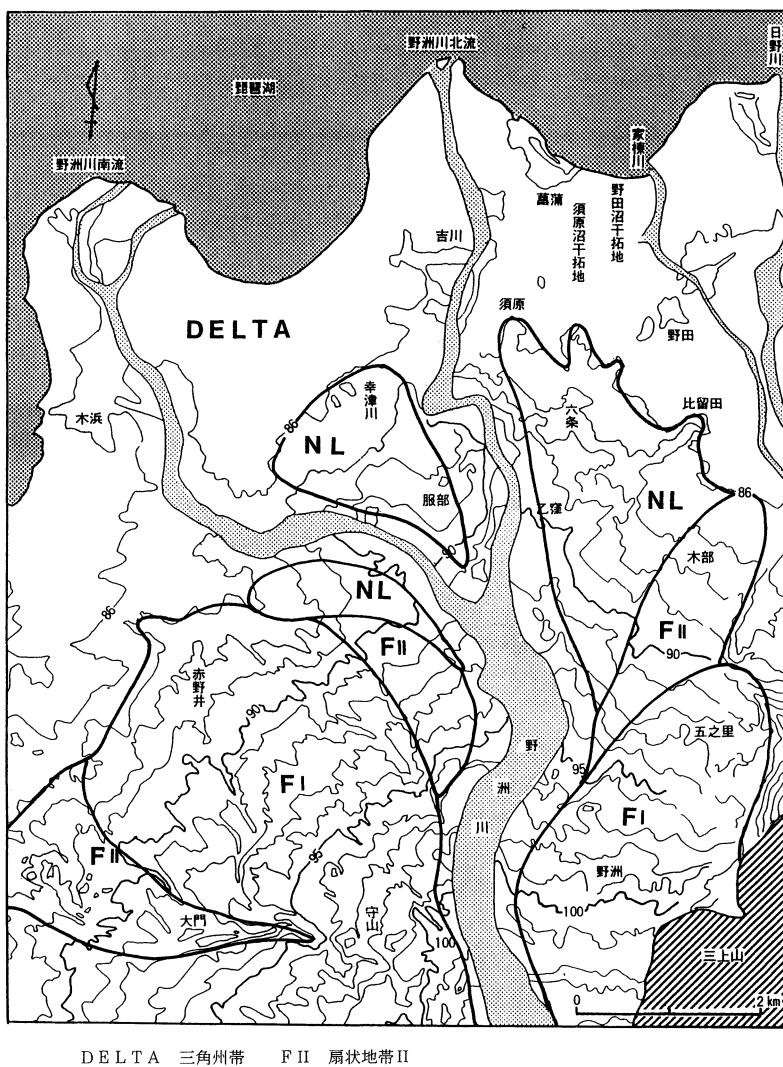


第5図 地形分類図（辰巳 1981に加筆）

過程とその時期が推定できた。それによると、扇状地の末端近くにある木部、八夫、虫生へ伸びる自然堤防は、弥生時代前期末～中期初頭に形成されたことが木部遺跡の調査から判明した。次いで、その下流側の現在でも明瞭な微高地列の続く西河原、比留田の集落をの

せるもの、および、さらに下流側の六条、安治の集落の立地するものへと順に時代が新しくなり、室町時代以降は、旧北流に沿って発達したことが明らかになった。

さらに旧北流堤防の削平工事による堤遺跡の発掘現場からは、堤防の築造が14世紀ごろ



第6図 野洲川流域平野の地形帯（高橋学 1991、等高線は辰己 1989による）

から始まり17世紀には 9 m 以上の堤防になっていたことが遺物や噴砂跡から判明した<sup>10)</sup>。

3) 埋没微地形図により、町内の各地域に於いて埋没している自然堤防や河道跡が指摘され、遺跡範囲の予察に有効であった。光相寺遺跡を例にとると、この遺跡は埋没自然堤防の北西斜面に位置しており、その北側には

埋没旧河道が南西から北東方向に走り、南側には旧河道が同じ方向に走っていることが読みとれ、現地での試掘調査の地層断面から判別できる水流の方向と一致していた。

4) 各遺跡での植生環境の変遷と土地利用の変化が明らかにされ、それらが地層の堆積や埋没微地形の分布状況と矛盾しておらず、各時代や時期ごとの景観変遷が考察できた。

第2表 光相寺遺跡のプラントオバール分析と環境変遷（外山秀一 1989）

試料番号	PA帯	特 徴		PO帯	特 徴	環 境	
		樹木花粉	草本花粉			遺跡付近の土地条件	周辺地域
1	VI	マツ属の急増 アカガシ亜属の減少	アブラナ科の急増 イネ科の減少	f <sub>5</sub>	イネの急増	安定、比較的低湿	
2	V	ハンノキ属の急増	アブラナ科の増加	f <sub>4</sub>	イネの增加		
3		スギ属・アカガシ亜属等の減少		f <sub>3</sub>	イネの增加	(12世紀)	
4							
5				f <sub>2</sub>	イネの減少	やや安定、比較的低湿 (9、10世紀)	湿
6	IV	スギ属・アカガシ亜属等の優占	イネ科の増加・優占				
7				f <sub>1</sub>	イネの増加	安定、比較的低湿 (8世紀前葉)	
8	III	針葉樹花粉の一時的な増加	イネ科の一時的な減少	e	全般的に検出量の減少	不安定、比較的高燥	潤
9							
10				d <sub>2</sub>	イネの減少	(7世紀中葉) やや安定、比較的低湿	温
11							
12			アブラナ科の一時的な増加				
13			イネ科の優占	d <sub>1</sub>	イネの増加 ヨシ属の減少	安定、比較的低湿 (7世紀前葉)	
14	II	スギ属の一時的な増加 コナラ亜属・アカガシ亜属の一時的な減少		c <sub>2</sub>	イネ・ヨシ属の減少		暖
15							
16							
17				c <sub>1</sub>	イネ・ヨシ属の増加	安定、低湿	
18							
19							
20			イネ科の一時的な増加 ヨモギ属の一時的な増加	b	ヨシ属・タケ亜科の安定した出現	やや安定 比較的低湿／比較的高燥	
21		ハンノキ属の一時的な増加					
22	I	検出数・種類が全般的に少ない	キク亜科の優占	a	検出量が全般的に少ない	不安定・高燥	

( ) 内はおよその時代

特に、光相寺遺跡、吉地薬師堂遺跡、八夫流遺跡においては、花粉分析、プラント・オパール分析の結果を含めて総合的に判断することができた（第2表参照）。

5)  $^{14}\text{C}$  年代測定の結果をみると、上流側の木部遺跡で地表面下 1 m 付近に縄文時代晩期から弥生時代前期の水田跡が発見され、その下の自然堤防堆積物からは  $2990 \pm 90$  y.B.P. という値が得られた。これは、上流側では自然堤防の形成が古いことを示し、その後の堆積が多くなったことを示している。

また、中央部の西河原森の内遺跡では 1600 ~ 1400 年前の新しい値を得ている。一方、湖岸部の 3 列ある砂堆列のうち、最も内陸側にある砂堆中の木片からは  $940 \pm 80$  y.B.P. という年代が得られ、砂堆の成長とともに、その内側に内湖が形成された時期が推定できた。そして、前述の旧北流の堤防が構築された時期との関係から、現在の湖岸部および河川沿いで湖中に突出する形の三角州の地形は室町時代以降に発達したということが明らかにされた。

## V. おわりに

遺跡の分布調査の段階から、このような地理学をはじめとする各分野の研究を取り入れて調査を行なった例は、中主町が全国でも初めてであった。そのため、当初予定していた調査項目と、その考察が不十分なまま、5 年の歳月を費やし、さらに本報告書の作成も遅れている。

しかし、毎年 4 人が同時に炎天下や寒風の中で、同じ露頭断面を切りながら、埋没地形や遺跡の存在について討議を重ねることがで

きた。また、この間に貴重な多くの資料の集積もあり、それらの分析も急がねばならない。そして、このような分布調査が、一つの町域のみで終わるのではなく、琵琶湖の湖岸平野全体はもとより、日本各地の平野で展開することができるよう関係各位に強く要望したいものである。

〔謝辞〕連日多忙な中で、このような遺跡分布調査を立案、実施し、自らも調査員として陣頭指揮をしていただいた辻広志氏をはじめ中主町文化財保護係の皆様に厚く御礼を申し上げます。また、調査員の立命館大学の高橋 学、皇學館大学の外山秀一の両氏とは、日頃から貴重な研究成果の提示と意見交換を行なうことができ共同研究をより有意義に遂行することができた。末筆ながら深く感謝します。

## 注

- 1) これまでに作成した 4 冊の報告書とその内容を以下に示す
  - (a)『昭和62年度 中主町内遺跡分布調査（II）概要報告書』（中主町文化財調査報告書 第15集）中主町教育委員会、1988、38頁。  
辰己 勝「野洲川下流の地形および地質・土壤の概要」。
  - 高橋 学「野洲川下流平野の地形環境分析 I」。
  - 辻 広志「試掘調査の概要」。
  - 外山秀一「六条遺跡における花粉分析ならびにプラント・オパール分析」。
- (b)『昭和63年度 中主町内遺跡分布調査（II）概要報告書』（中主町文化財調査報告書 第19集）中主町教育委員会、1989、44頁。  
辻 広志「中主町内における古代の集落跡分布」。
- 辰己 勝「琵琶湖東岸の平野地形の特徴と光相寺遺跡周辺の地形」。
- 高橋 学「野洲川下流域平野の地形環境分析 II」。
- 外山秀一「光相寺遺跡における花粉分析ならびにプラント・オパール分析」。
- (c)『平成元年度 中主町内遺跡分布調査（II）概要報告書』（中主町文化財調査報告書 第25集）中主町教育委員会、1990、46頁。  
辻 広志「平成元年度の調査概要」。
- 辰己 勝「琵琶湖湖岸平野の地形」。
- 高橋 学「野洲川下流域平野の地形環境分析」。

- III」。
- 外山秀一「吉地薬師堂遺跡におけるプラント・オパール分析」。
- ④『平成2年度 中主町内遺跡分布調査（II）概要報告書』（中主町文化財調査報告書 第29集）中主町教育委員会、1991、40頁。
- 辻 広志「平成2年度の調査概要」。
- 辰巳 勝「野洲川下流域平野の地形と地下構造」。
- 高橋 学「野洲川下流域平野の地形環境分析Ⅳ」。
- 外山秀一「八夫流遺跡における花粉分析ならびにプラント・オパール分析」。
- 2) 1993年度人文地理学会大会（於神戸商科大学）で連名で発表。
- 3) 日下雅義『歴史時代の地形環境』、古今書院、1980、392頁。
- 4) 安田喜憲『環境考古学事始—日本列島2万年—』、日本放送出版協会、1980、270頁。
- 5) 井関弘太郎『沖積平野』、東京大学出版会、1984、145頁。
- 6) 高木勇夫『条里地域の自然環境』、古今書院、1985、238頁。
- 7) 主なものに、高橋 学「埋没水田遺構の地形環境分析」、第四紀研究27-4、1989、253-272頁。  
阿子島功「考古学発掘調査からわかった微地形発達史」地理34-2、1989、110-119頁。
- 阿子島功「考古学発掘調査のための微地形分類」地理33-8、1988、100-109頁などがある。
- 8) 第四紀研究27-4「陸の古環境復元」特集号、1989、360頁。
- 9) 第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『講演収録集 新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』、クバプロ、1989、214頁。
- 10) 辻 広志「野洲川北流高水敷で発見されたM 7.6 の地震跡—滋賀県野洲郡中主町・堤遺跡—」、滋賀考古第9号、1993、63-66頁。